今、私たちが思うこと

早稲田大学

震災復興のまちづくり(JA共済寄附講座)

2012年6月6日

はじめに

5 月 19 日、宮城県気仙沼市を訪れました。

初めての気仙沼、何度も通った気仙沼、ふるさと気仙沼。

私たち受講生の中でも、これまでの気仙沼との関わり方は様々でした。

まちを歩き、地元の方のお話を聞き、海を見て

何を感じたのか。

そして今、何を思うのか。

気仙沼復興塾のメンバーひとりひとりの

気仙沼実習で伺ったお話の中で特に印象に残った一言と、

そこから感じたこと、

今後の意気込みを

お伝えしたいと思います。

気仙沼は「海と山と生きる」地だ。

「海の恵み」は何よりの誇り。

正直最初は、被害に遭いながら高台に早く住まいを移さないことや、

高い防潮堤を作ることを拒否する事が理解出来ずにいた。

『海と生きる』

相手の気持ちに立って考える、

まだまだ自分もできていないし、日本社会全体でもできていないことを痛感。

海に抗うのではなく海と生きる。

気仙沼と東京の架け橋になりたい。

気仙沼の人は、

人と人の直接的なつながりを大切にしているのだと実感。

『食材が旅するのではなく、人が食材を求めて旅するストーリーを作りたい』

「流通の仕組み＝気仙沼から日本へ流すこと」だと考えていた。驚いた。

気仙沼の人々は地元に対して強い誇り・愛を持っている。

東京に住む人々が自分自身の「食」にもう一度向き合う機会を設けたい。

『海で仕事ができることが幸運』

気仙沼の人達は本当の意味で自然と共に生きているのだと思い知った。

気仙沼の方の地元への思いが復旧・復興の原動力だ。

『気仙沼のかつおは他のどこのかつおより美味しい』

実際に食べたら他のところのかつおより格段に美味しく、

とても強力な武器であると確信した。

『本当の魚を食べていないのではないか』

誇り高き気仙沼のかつお、東京の野菜。掛け合わせによってどんなものが生みだせるか。

『噛めば噛むほど味が出るおいしさもある』

気仙沼も知れば知るほど魅力的なところ。

『消費者と生産者の信頼・安心があるからこそ"おいしい"』

「より安く、より質の良いものを」という消費者による要求が矛盾を孕んでいる。

それこそが被災地の方、第一次産業に従事されている方の首を絞めていることを実感。国産のものが高い理由は信頼・安心ではないか。

『一番大切なのは子供』

震災当日のエピソードと共に、思いが伝わってきた。

『正義の心』

正義の心を持ってくれと真正面から言われた、

その言葉の背景に気仙沼の方々の大変なご苦労と努力を感じた。

これからへの意気込み

人間科学部４年　池本紗希
「海と生きる」この言葉が一番印象に残っている。正直最初は、被害に遭いながら高台に早く住まいを移さないことや、高い防潮堤を作ることを拒否する事が理解出来ずにいた。でも話を伺って、海を愛する思いと、今までそしてこれからも共に生きていこうという思いをひしひしと感じた。街の人達のこの思いこそが気仙沼を作っており魅力となっているのだと思う。自然と決別したり押さえつけたりするのではなく、共存できるまちづくりのサポートをしたい。

教育学部２年　及川一斗
気仙沼は祖父母や親戚が住んでいて、私にとってとても馴染み深く、居心地のいい町です。夏に帰ると、そこにはいつも美しい海と町がありました。震災によって町は変わり果てしまいましたが、私は変わらず気仙沼が大好きです。今でもそこには美しい海があり、人が生きています。私は外部の人間だからこそ分かる気仙沼の魅力をより多くの人に伝えていけたらと思っています。

教育学部４年　大澤修平
気仙沼の人、物、風景はとても魅力的です。では私たちはどうか。「気仙沼復興塾」のプロジェクトを通じて私たちも自分自身を魅力的に。気仙沼の魅力を伝えたいならば、何よりも自分自身が魅力的になるのが良いと思います。頭も手も足も全部使って頑張ります。今日はどうぞお楽しみください！

政治経済学部３年　岡本大
気仙沼での１日を通して、「海と生きる」という言葉が気仙沼で生きる方々の根底に流れているキーワードだと強く感じた。海に抗う(防波堤を築く)のではなく、海と生きる(津波で人が死なない街を作る)のが、気仙沼の方々の生き方だと思った。この活動は、同じ海に生きるカツオという資源をどのように活かすのか、それを真剣に考える場にしたい。

社会科学部３年　笠岡美希
先月、気仙沼で行った実習で、私たちは気仙沼の方々にとても温かく迎えていただきました。気仙沼の役に立ちたいという気持ちが強まると同時に、私の住んでいる地区ではこのようなもてなしができるかなと顧みるきっかけにもなりました。「『気仙沼のものを食べたいから気仙沼に来る』というストーリーを作りたい」とおっしゃっていた観光課の畠山さんの言葉を形にするお手伝いをしたいです。

国際教養学部５年　金相佑
留学生の立場で今の日本を分かるためとった授業が気仙沼との縁を繋いでくれました。ここまで至るまで、優しい先生と意志の高い学友との絆ができ、先月の気仙沼見学では海を見直せるようになりました。そしてこの絆と思いを世界中に広げたいです。本日の美味しいカツオが世界中から愛されるまでに。

政治経済学部３年　黒澤佳
私は先日の実習には参加できなかったのですが、陸前高田でボランティアをした際に気仙沼も数回訪れました。その際の市場や復興商店街の方のバイタリティあふれる笑顔が今でも強烈に印象に残っています。気仙沼人はとてもアツい、と聞きました！そのアツさに負けないくらい私も精力的にこのプロジェクトに取り組んでいきたいと思います。

商学部３年　河野紗矢香
子供の頃、友達とつくった秘密基地。「自分だけが知っている」そんなわくわく感を思い出す。気仙沼は他県から行くには少し不便な場所。しかしだからこそ覗いてみたい、そんな気持ちが湧いてくる。かつおをシンボルに気仙沼の名前をさらに広める一方で、「実際に来てみないとわからない、景色・人・暮らしの中にたくさんの魅力がギュギュッと詰まった場所ですよ！」ということも伝えていきたい。

政治経済学部１年　後藤大輔
気仙沼の海のそばで仕事が出来てこんな幸せなことはない(斉藤社長)。気仙沼の方の地元への思いが復旧・復興の原動力であり、我々に出来るのは魅力あるイベントを通じてこのような気仙沼の方の地元への思いをくすぐることではないか。消費地東京と生産地気仙沼との食を通じた繋がりを深めていきたい。

政治経済学部３年　櫻井星見
気仙沼の人たちは誰もが「海と共に生きる」と言う。ここの人たちにとって「海の恵み」は何よりの誇りだと思うし、このことを外部の、特に大都市の人たちに伝えることで、人はもっと豊かになれると思います。私たちがこのことを知ったからには、その魅力を伝えられる存在になるべくさらに学ばなくては。

法学部３年　佐藤南平
先日の気仙沼実習に参加した時、気仙沼に住む人たちの地元を思う気持ちの強さに心を打たれました。この授業でのプロジェクトを通して気仙沼の魅力をできるだけたくさんの人たちに伝えることで、気仙沼まで実際に足を運んでもらい、もう一度気仙沼に活気を取り戻すことができればいいなと思っています。

社会科学部２年　杉山洋介
僕は「魚が動くだけではなく、人も動いて是非お魚を食べに来てほしい。」という実際に気仙沼の美味しい魚を食べに来てほしいというメッセージをお聞きしました。そしてまず、気仙沼の良さをたくさんの人に知ってもらいたいと思いましたし、僕自身ももっと知りたいと思いました。気仙沼の人の良さもっと広げていけたらなと思います。

社会科学部１年　高橋歩
私は気仙沼の人たちの笑顔に惚れました。気仙沼と東京で、キョリは遠いけれど、心では近くに感じられるような関係が築けたらいいなと思います。お互いが“心のふるさと”として思い合えるような関係になれたら嬉しいです。気仙沼と東京の魅力を一緒に共有し、あたらしい“つながり”をつくりたいです。

創造理工学部３年　田所玲奈
「噛めば噛むほど味が出るおいしさもある」という言葉が印象に残っています。気仙沼は知れば知るほど魅力的な所です。気仙沼を訪れたときに「海が歓迎している」という言葉をいただき感動しました。この感動をより多くの人に知ってもらいたいという思いでいっぱいです。

創造理工学部１年　田中元基
現地のみなさんと直接会って、感覚が変わりました。お話を聞いて、さまざまな知識を得ました。気仙沼のかつおの魅力をもっともっといろんな人に伝えたいです！他とは違うんです！みなさん！ぜひ感じてください！みなさんの感じ方で気仙沼は輝きます。

文化構想学部３年　玉野航己
「海と共に生きる。」
気仙沼実習を通して一番強く心に残った言葉だった。
相手の気持ちに立って考えるという、小学校で教わったようなことが、まだまだ自分もできていないし、日本社会全体でもできていないことを痛感した。
気仙沼復興塾のメンバーとして、気仙沼の方たちの思いを東京に住む多くの人に伝えていきたい。

教育学部４年　仲田有佑
「海と生きる」
気仙沼で良く耳にした言葉だ。
しかし、何か引っかかった。
東京に帰って、やっと気づいた。

私が引っかかっていた事。
それは、「海」も「山」も美しかったことだ。
街から海も山も近い。
だから、海も山も生活の場だ。
つまり、気仙沼は「海と山と生きる」地だ。

気仙沼の豊かな漁場は、豊かな山が、それも、人の手が入った里山がつくる。
山が海をつくること。
その地で生きる者には「当たり前」だが、都会の人は「知らない」だろう。
今、街も行政も国も「海」と向き合っている。
だからこそ、私は、向き合いたい。
「山」と向き合いたい。

商学部４年　根之木静佳
商品そのものの魅力は勿論、その土地を訪れたくなるような魅力（観光という切り口）も併せて伝えたい。気仙沼の情景や人などを、どう他地域と差別化して発信できるか考えたい。
気仙沼の人の強い地元愛は、大きな魅力だと思う。日本全体で地元を離れる人が多いなかで、「海と共に生きる」ほど強い誇りを持てる地とはどのような所なのか、関心を集めるのではないか。

文化構想学部２年　孕石絵里
気仙沼市長の“本当の魚を食べていないのではないか”という問いかけに私はグサリと突き刺さりました。また、気仙沼の方々のかつおへの誇り、そして希望を肌で感じました。誇り高き気仙沼のカツオと東京の野菜を掛け合わせることによってどんなものが生み出されるのか、そしてそれらがわたしたちに与えるものとは何か、実際に目にし、感じていきたいです。

法学部２年　平岡絢
私はこれまでの気仙沼での活動を通して、気仙沼の人々の温かさや、自然の美しさなど、気仙沼の良さをたくさん知ることができました。しかし、気仙沼は交通の便が不自由であることなどからその良さはあまり多くの人に知られていない気がします。ですので私は今後の活動を通して少しでも気仙沼と東京の架け橋になりたい、そして「海と生きる」という気仙沼の方たちのお手伝いが何か少しでも出来ればなと思っています。

人間科学部２年　牧野圭佑
これまで私は気仙沼を数回訪れているのですが、その度に人を迎え入れてくださる温かさを感じます。人が温かい、景色がいい、料理がおいしい。気仙沼は訪れる度に帰りたくなる街です。この魅力を多くの方にも知っていただきたいのでそのお手伝いを是非したいと思っています！

人間科学部３年　松崎　咲慧
「食材に旅をさせるストーリーではなく、食材が人を（気仙沼に）旅させるストーリーにしたい。」
　気仙沼の食への期待や自信、気持ちを改めて実感する言葉でした。今後は、東京に住む人々が自分自身の「食」にもう一度向き合い、新たな価値観で食材を選択する機会を設けることができたらと思っています。

教育学部２年　森泉拓哉
自分は聴講生のため気仙沼実習に参加することができなかったのでとても残念です。しかし行かずとも自分自身でも思っていることあります。一学生としてできることとして、中からは見ることができない何かを外から見つけてそれを外に発信していくことではないかということです。そして笑顔を中に届ける。そのためにも自分が常に笑っていたいです。

法学部１年　山岸由布
未だに風評被害の影響は大きいと聞きます。私達消費者がする一番の被災地支援とは、やはり「被災地のものを食べる」こと。これからこの授業をすすめていく中で、どのようにしたら消費者と生産者の間に信頼関係が構築できるのかを真剣に考えていきたいです。

社会科学部３年　山地裕紀
懇親会で食べたカツオは非常においしく、私の今までのカツオというものを根底から覆した。獲れたてのカツオはどれ程おいしいかを想像すると心が躍り、それを食べるためなら気仙沼へのアクセスが悪いことに目をつぶれるくらいであった。そこで、気仙沼を訪れたいと思う人を増やすために、このおいしさをできるだけ多くの人に伝えたい。

文化構想学部４年　結川真悟
どんな話を聴いても、どんな現場を見ても、自分が決して“被災当事者”なれないと思った。では、“どんな立場から”震災と関わるか。“傍観者”にはなりたくない。“当事者意識”を持って、“よき仲間”になりたいと思う。

人間科学部２年　若山修也
私たちにいったい何ができるというのだろう、何もできないかもしれない。けれど、何かせずにはいられない。そう思わせる気仙沼の魅力、人、海、文化。伝えたい、一人でも多くの人に。

おわりに

実際に現地を訪れ、
多くのメンバーが感じた気仙沼の『魅力』。

しかしそれは一体何なのか、
どこから生まれてくるのか。

これからさらに気仙沼のことを学び、
皆でじっくり話し合いながら
見つけていきたいと思います。

そしてその上で考えたい。
気仙沼が前よりもっと元気になるために、
私たちだからできること。

今はまだ具体的なものは見えていないけれど、
気仙沼と向き合う一方で、
今、私たちが暮らす“東京”のことも見直しながら
広い視野で色々な可能性を考えていきたいと思います。

本日はお越し頂き、ありがとうございました。